

近代仏教研究における儀礼

武 井 謙 悟

はじめに

儀礼に関する定義は多種多様である。宗教性を伴う行為だけでなく、日常生活における様々な習慣を儀礼として扱う場合もある。また、儀礼の執行者、参加者といった主体によって意味付けも異なり、多くの要素が複合している。本稿では、そういった複雑性を持つ儀礼を対象とするが、定義や個別事例の考察ではなく、儀礼研究の研究史という視座から、近代仏教における儀礼を検討することを目的とする。本目的は、近代仏教研究においてなぜ儀礼が扱われてこなかったのか、という問題意識にもとづくため、まず、近代仏教研究の儀礼に対する言及を最新の成果から溯ってみたい。

『現代思想』収録の、二〇一八年七月一五日開催の近代仏教研究を牽引する四名の研究者による座談会では、一九六〇年代の吉田久一、柏原祐泉、池田英俊らの成果を「第一のピーク」、二二世紀以降から現在に至る隆盛を「第二のピーク」とし、現在のピークが続くようにと締めくくられている。本座談会では「仏教研究におけるマテリアルとプラクティス」という項目があり、仏像を扱った碧海寿広の著作^{〔2〕}に関する討論がなされたのち、儀礼へと話題が転換する。ここでは、大谷栄一が、現在の坐禅、プチ修行、巡礼といった体験型の仏教を挙げ、儀礼を近代仏教研究で取り上げてこなかった点と、仏前結婚式研究を例示し、主題化の必要性を提起している。それに対して林淳は、各宗派が実施している儀礼は近代的だと述べつつも、いつ、どのよう^{〔1〕}に作られ、変化したのか、という点は当事者でも分からず、記録の保存も曖昧であると指摘した。続けて碧海は、身体的なものによって伝承されているプラクティス研究の難しさに言及し、近藤俊太郎は、知識人の書いた著作が研究対象になる傾向が強い、と各々が儀礼研究の困難さを述べている。

「第二のピーク」の象徴とも言える、二〇一六年刊行の入門書『近代仏教スタディーズ』においても儀礼は課題として提示されていた。その理由として、大谷は、広義の近代仏教を、出家／在家および信仰／実践の区分を用い四象限に分類した上で、教義の近代仏教（在家・信仰）が、これまでの近代仏教研究の大多数を占め、実践部分は民俗学、新宗教研究が担ってきた、という棲み分けを指摘している。また、同書で儀礼の項目を担当した江島尚俊は、「明治から続く、知識人たちの儀礼を単なる習慣とする理解が、アカデミズムにも引き継がれた結果、儀礼研究が語られなかった」と述べている。

さらに溯れば、二〇〇九年に碧海が、雑誌『新仏教』誌上に見られる、葬式不要論や読経廃止論などの論争を扱ったが、その際にも、末木文美士の「葬式仏教などの儀礼的要素もまた、近代の仏教思想家、仏教研究者たちによって隠蔽され、それを論ずることはタブー視されてきた」という文を引用しているように、一〇年以上前から近代仏教研究において儀礼が対象となりづらい傾向は継続していると思われる。

先行研究の指摘をまとめれば、以下の三点が近代仏教儀礼研究の進まない要因とされる。

- ① 棲み分け論（儀礼研究を民俗学、新宗教研究が担う）
- ② 教理・信仰優先の仏教研究（プロテスタント宗教概念の受容）
- ③ 資料的制約

これらは、研究蓄積の結果から特徴を見出しており、近代の儀礼研究自体を捉えたものではない。そこで本稿では、宗教学、文化人類学、民俗学の儀礼研究を参照しつつ、日本における儀礼研究の変遷を辿る。本手法により日本の儀礼研究の特質を理解し、近代仏教研究で儀礼が扱われてこなかった要因を再検討したい。

一 儀礼研究の誕生

1 行為としての儀礼

タラル・アサドは、儀礼概念の形成を『大英百科』「ritual」の項目から検討している。一七七一年の初版では、「ある特定の教会、教区、修道会などにおいて、宗教的儀式を挙行し、礼拝を挙げるに際して従うべき規定と作法を指示する本」という説明であった。ritualは、一九一〇年の一一版に新たな項目が追加される。その構成は、「導入部」「ritualにおける呪術的要素」「ritual

の解釈「ritual」における変化「ritual」の分類「消極的 ritual」であり、文献一覧にはタイラー、ラング、フレイザー、ロバートソン・スミス、ユベール、モースの一般論文と、スペンサーとギレンおよびクツシングによる民族誌的論文が掲載されているという。ここでアサドは、一九世紀後半、ritualの語が、行動を規制する「台本」から「行為」へと変化した、と指摘している。行為を意味する「儀礼」に関する研究史は、文化人類学の分野でまとめられることが多い。例えば竹沢尚一郎は、近代の儀礼研究を三つの時期に分類している。第一に、一九世紀後半から二〇世紀前半までの、フレイザーやタイラーによる、進化論を根底に置き、「未開社会」を対象とする時代。第二に、一九二〇年代のマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンらによる機能主義の時代。第三に、一九六〇年代のレヴィ＝ストロース、ヴェイクター・ターナーらの象徴論の時代、である。第三の時代以降も文化人類学の儀礼研究は発展しており、綾部真雄は、儀礼研究のアプローチとして、①象徴論的アプローチ、②解釈学的アプローチ、③言語行為論的アプローチ、④過程論的アプローチ、⑤行動生態学的アプローチ、⑥応用研究、の六点を挙げている。

このように、文化人類学では豊富な儀礼研究の蓄積と研究史がある。しかし日本国内の儀礼研究に関しては、多く語られていない。日本でも中国の書を示す『儀礼』と行為を示す「儀礼」の語が併存していたと考えられるが、宗教実践を示すものとして「儀式」や、仏教では「法会」「法式」、神道では「祭祀」「祭礼」といった様々な用語が使用されている。また、雑誌記事索引集成データベース「ざっさくプラス」を使用しても、戦前の「儀礼」を含む記事は五〇件程度と、ほぼ使用されていない。そもそも宗教の行為的側面として「儀礼」の語が認識され、研究対象になる経緯がどのようなものだったか。戦前の日本における儀礼研究を検証してみたい。

2 戦前日本の儀礼研究

日本宗教学の祖とされる姉崎正治（一八七三～一九四九）は、一九〇〇年の『宗教学概論』第三部、「宗教倫理学」において「儀礼 (Kaiti・Chitai)」を扱っている。姉崎は、儀礼を神人融合の手段として捉え、具体例として、目前の利害を祈願する儀式、神意を畏敬して神法を奉ずる行動、靈化成仏の為に意を淨くして行う道徳、という三種を挙げ、儀礼を宗教的意識の行動的発表とした。姉崎は、儀礼を道徳や軌範の一部としており、儀礼自体を主体としなかったが、儀礼を主題化したのは、姉崎門下

で宗教民族学を確立した浄土真宗本願寺派寺院出身の宇野円空（一八八五～一九四九）であった。

宇野は、一九二七年に論文「宗教的儀礼とその態度」（『宗教研究』新四巻五号）を発表した。本論文では、儀礼先行論や、宗教的な意識と行為との関係性といった欧米の研究動向を紹介している。その後、一九二九年に『宗教民族学』（岡書院）、一九三一年には『宗教学』（岩波書店）で理論をまとめたのち、一九四一年には『マライシヤに於ける稲米儀礼』（東洋文庫）を刊行した。本書は、文献整理に関して単に欧米言語の翻訳ではなく、インドネシア系諸語から直接の邦訳を試みるなど、「欧米学者の到達し得ざる境地を開拓した」と評され、日本学士院恩賜賞を受賞した。宇野は欧米の宗教民族学理論を批判的に検討して、自身の理論を構築したが、その背景にはグレイプナーやシュミットなどのウイーン学派の歴史民族学の影響が顕著に見られるという¹⁴。なお、宇野は晩年に、『社会学体系』に「儀礼」の項目を執筆している¹⁵。

宇野は、「宗教民族学」を確立し、儀礼を積極的に主題化したのが、彼の影響を大きく受け、儀礼研究を行ったのが、棚瀬襄爾と竹中信常であった。

棚瀬襄爾（一九一〇～一九六四）は、宇野と同じく浄土真宗本願寺派の寺院に生まれた。一九三五年に「宗教儀礼の序論的考察」（『宗教研究』新一二巻四号）にて、宗教儀礼を「宗教における外部的なるものの称¹⁶」と広く定義した。さらに、儀礼の訳語にも触れ、rite、ritualを一定の慣習を伴う儀礼、cult、worship、Kultusを必ずしも一定の慣習を必要としないものとした。また、宗教性の有無によって、ceremony（儀式）、custom（一般的慣習）と儀礼の区別にも言及した。本論文では、宇野の儀礼研究に加え、フランス社会学派の宗教研究をもとに儀礼の社会的拘束性を説いた古野清人の論考¹⁷も紹介しており、当時の儀礼研究の動向が明瞭に把握できる。棚瀬は、一九四一年に『民族宗教の研究』（畝傍書房）、一九四四年に『東亞の民族と宗教』（河出書房）を上梓し、戦後も『宗教文化史学序説』（青山書院、一九四八年）を刊行するなど、宇野の正統後継者¹⁸として精力的に研究していたが、心臓発作により急逝した。その死は、堀一郎（一九一〇～一九七四）によって惜しまれている¹⁹。

一方、浄土宗寺院出身の竹中信常（一九一三～一九九二）は、一九四一年に「宗教儀礼の衝動性」（『宗教研究』季刊三年一輯）を発表し、宇野の著作と心理学を併用して、個々の宗教的儀礼の基底に横たわる心理的動因の究明を目指した。竹中は、僧侶としての教化実践と学理探求を日課とする立場から、宗教を「信仰」と「実践」という二つの面の相即の上のみ成り立つものと定義した²⁰。そして、信仰面に関して一九五七年に、『宗教心理の研究』（青山書院）を、その翌年に実践面に関して『宗教

儀礼の研究」(青山書院)を上梓した。本書は、大正大学へ提出した博士論文『比較宗教学より見たる儀礼の理論と様態』を骨子とし、マレット、マリノフスキー、ロバートソン・スミスや、宇野円空、松村武雄の説をまとめている。なお、後述するが、竹中の系譜は藤井正雄に継承されることとなる。

3 小括

姉崎正治が宗教倫理学の一部として扱った儀礼は、宇野円空によって宗教民族学研究の主要なテーマとなった。その後、棚瀬と竹中が宗教儀礼研究を定着させた。これらの成果の中心は、欧州の研究動向の紹介や、台湾、マレーシアなどを対象とする研究など、国内の儀礼に関してはほとんど言及が見られない点が特徴と言える。また、植民地と占領地における人類学的調査活動を検証した中生勝美の著作に対する書評にて、大澤広嗣が指摘するように、近代日本の人類学史の形成に浄土真宗本願寺派の僧侶が深く関わっていた。竹中を含め、戦前の宗教儀礼研究を確立させた研究者たちは浄土系の寺院出身であったという点は、儀礼観に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

この点に関して、例えば宇野は、「礼拝や祈願のような普通にはそれ自体宗教的と考えられてる行動でも、畏敬の態度をもつて行われるのでなくては、真に宗教するものとは言えず、その代わりにこんな宗教的態(度)をもつてすれば、いかなる生活行動でもそのまゝ、宗教の当体である」とし、竹中は、「儀礼とは聖なる宗教的境地(仏教でいうならばさとりの心境)に到達し、あるいはこれに近づくために、ある定められた儀軌に従っておこなう行為をいうので、その裏には「信仰心」がなければならぬ。信仰をともなわぬ儀礼はいわゆる「儀礼主義」と呼ばれるみせかけの儀礼にすぎない」と述べている。これらは、聖なるものへの畏怖を前提にした儀礼観であり、曹洞宗の修証一等(修行と悟りを区別しないこと)とは異なるニュアンスが感じとれる。また、柳川啓一(一九二六―一九九〇)が、「浄土真宗本願寺派は、私も檀徒の一人であるが、アメリカ本土布教を始めて八〇年、いまだに日系人の枠の中の宗教にとどまっている。原因の一つは、浄土真宗に「儀礼」の乏しいこと、あるいは、教体系の中に儀礼の高い位置づけのないことであろう」と、浄土真宗の儀礼への態度を指摘するように、信仰を重視する教体系を背景に持つ研究者たちが儀礼研究を開拓した、という事実は重要である。

以上、日本の宗教研究において儀礼を対象化する過程を見てきた。国外の研究が大半を占めたが、国内の宗教実践は主に民

俗学が扱っていた。

二 戦後日本の儀礼研究

1 民俗学と仏教民俗学

柳田国男（一八七五—一九六二）は、一九二九年に「葬制の沿革について」を発表し、「斯ういふ住民の何とも思はずに過ぎて居る生活の中に、却つて古風の尋ねべきものがあるのでは無いかと私などは思つて居る」と述べ、葬儀の不変的な部分が「民俗」の解明に役立つとした。一九三七年に出版された『葬送習俗語彙』では、「幸いなことには他の色々の習俗とちがつて、葬儀はその肝要な部分が甚だしく保守的である。喪家が直接にその事務に当らず、これを近隣知友に委託する為に、後者はもっぱら衆議と先例に依つて、思い切つた改定を加えようとしないからである」と、より明確な形で葬儀の保守的な部分を主張している。柳田は、「常民」がいまも実施している習俗や行事に日本の原点を見出そうとしたために、外来宗教である仏教的要素を否定した。そういった柳田の姿勢に反抗するかのごとく登場したのが、五来重（一九〇八—一九九三）が提唱した「仏教民俗学」であった。五来は、仏教と関わりのある民俗を、①仏教的年中行事、②法会、祈禱、③葬送習俗、④仏教講、⑤仏教芸能、⑥仏教伝承、⑦仏教的俗信、に分類し、多大な功績を残した。五来の仏教民俗学、思想に関しては研究蓄積があるため、本章では、仏教民俗学の普及事例として関東の仏教民俗学会の発足を取り上げたい。

関西を拠点として活動していた五来に対する運動として、関東では、一九五六年三月、大正大学で当時文学部長であった星野俊英をはじめとして、中村康隆、加藤章一、竹中信常、吉岡義豊、古江亮仁ら大正大学関係者と井之口章次、高野進芳を幹事に加え、仏教民俗学会の趣意書が出された。同会は同年六月二七日、東北大学教授であった堀一郎の「仏教民俗学の意義」と題する記念講演で発会し、同年には奥多摩の神葬祭地区の踏破も試みている。浄土宗寺院出身の中村康隆（一九〇六—二〇〇八）による回顧録に仏教民俗学会の意義が述べられているため、やや長くなるが引用する。

当時は本来の柳田翁の固有民俗の解明を志す流れに反するものと難ぜられたものであった。しかし私たちは、当時仏教研究の対象として認められていず、また民俗学の研究からも異端と目されたこの仏教の民俗学的研究こそ新たな学問分野を開拓するものとの確信の下に発足したのであった。

われわれがそのような学問領域の開拓に志した一因は、一つには敗戦後の社会的精神的アノミー症状の中で、ともすれば大衆が伝統的価値を放擲して物質文化の波間に流転して僅かに救いを新興宗教の族立に委ねている状況を憂えるとともに、一方では日本民俗の見直し気運が醸成されつつある風潮に勢づけられたものでもあるが、とりわけて伝統的な仏教と正統派民俗学の双方から異端外道視され白眼視されることへの反発からでもあった。特に明治から昭和の初期の頃には葬式仏教の非難と葬式無用論が幅を利かせていて、葬儀によって民衆と深く結合し得た力が仏教の維持力となり、また民衆の仏教信仰への傾斜を招き得た事実が軽視されていたのであった。

新宗教族立の状況下で、仏教と民俗学、その二つからこぼれ落ちる「仏教民俗学」の重要性を主張した。仏教民俗学会の会員の成果は、真言宗寺院出身加藤章一の古稀記念論文集『仏教と儀礼』（国書刊行会、一九七七年）にまとめられている。

2 仏教儀礼研究の確立―藤井正雄の功績

仏教民俗学と、人類学の理論を合わせて、仏教儀礼研究を確立させたのが、藤井正雄であった。

藤井正雄（一九三四～二〇一八）は、竹中信常と同じく浄土宗寺院出身であり、学生時代に竹中の『宗教儀礼の研究』の索引と英文レジュメ作成を手伝っている。一九七三年に「仏教儀礼の構造比較」などの功績によって日本宗教学会賞を受賞した藤井は、一九七七年に『仏教儀礼辞典』（東京堂出版）を編集した。その後一九八一年に倉林正次主唱のもと発足された「儀礼文化学会」の取り組みとして『儀礼文化叢書二 日本仏教の儀礼』（桜楓社）、一九八三年に中村元監修『日本人の仏教一〇 仏教の儀礼』（東京書籍）の編著を担い、「仏教儀礼」という用語を浸透させた。

藤井は、宗教を理念としての教義、行為面としての儀礼、形態面としての教団、という三本の柱の相互作用からなる全体とした。²⁹ 施餓鬼の儀礼構造を分析した「仏教儀礼の構造比較」では、定型化された諸宗派の儀礼を、それぞれが関連をもつ体系と捉え、各宗派の儀礼書をもとに、対自儀礼、対他儀礼などの類型を行なっている。宗教を社会の副産物としてではなく、自律的存在として捉えるエヴァンス・プリチャードの説と、儀礼行為、象徴の分析が社会構造の理解の鍵であるとするヴィクター・ターナーの理論を援用しつつ研究を展開した。

藤井は、「仏教儀礼」を、仏教の教義を一定の形式をもって表現する行為とし、仏教儀礼は単なる形式的な行為ではなく、行

為それ自体が教義をふまえた意味の体系をなすものとみなす³¹⁾。仏教儀礼から教義に迫るといふ逆照射を試みる点は、儀礼を従属的なものとみなすプロテスタント的な宗教概念とは異なる。

他方、仏教民俗学に関して、藤井は、主に三つの発展方向があるとした。第一に、従来の民俗学の系譜の継承である（仏教の民俗化）にもとづく仏教民俗学の構築。第二に、仏教教義を駆使して民間信仰・習俗に意味づけを与え組み入れを行い、または逆に民間の習俗によって仏教の体系が変容されるという、〈民俗の仏教化〉にもとづく仏教民俗学の構築。そして第三に、〈仏教の民俗化〉と〈民俗の仏教化〉の両面を総合する仏教民俗学の構築である。藤井は第三の発展を目指していたようであり、「民俗学を中心に仏教学・宗学（仏教学派の教学）の研究をふまえながら人類学的・社会学的・心理学的アプローチという諸分野の研究の多面性を総合した仏教民俗学の樹立³²⁾」という学問横断的な手法で儀礼研究を進展させた。

3 一九七七年という転換点

藤井正雄が編集した『仏教儀礼辞典』が登場した一九七七年は、象徴的な儀礼研究の先駆的存在³³⁾であるファン・ヘネップの『通過儀礼』が翻訳された年でもあり、儀礼研究の転換点とも言える。同年には先述の仏教民俗学会『仏教と儀礼』刊行に加え、九月一〇、二一日に立正大学で実施された第四七回日本仏教学会のテーマは、「仏教儀礼―その理念と実践―」であった。翌年、平楽寺書店から、同大会の発表論文集が発行された。序文には、これまで日本仏教が、「儀式仏教に過ぎない」という批判を耳にししながら、見過ごしてきた仏教界の現状を振り返り、

しかし、今日まで、自ら儀式の執行をこととしていながらもかかわらず、そのことのもつ積極的な意義を、仏教の教義に照らして明らかにしようとする試みは、余りにも稀に過ぎたといわねばならない。そして、このことが、仏教における実践の確かな方途を、明朗な意識のもとに領くことを阻止していたのではないかとすら考えられる。（中略）こうした学術大会での成果を、単に本学会員だけのものとすることなく、改めて単行本として平楽寺書店より発行することによって、仏教の学会が、このような実践的課題にアプローチすることの意味を、広く世に問おうとするものである³⁴⁾。

このように一九七〇年代後半に「仏教儀礼」の語が定着していくが、柳川啓一が指摘するように、この背景には一九六〇年

代後半に、ヴィクター・ターナー『儀礼の過程』（一九六九年）などによって、「宗教とは、信仰、信心を中心とするものであって、儀礼は二次的なものとするプロテスタントの傾向の影響を受けた宗教概念」の見直しが進んだことも影響している⁽³⁵⁾。また、ロジャー・グレンジャーの『言語としての儀礼』（一九七四年）など、プロテスタント神学からも儀礼の見直しが図られた。

一方で国内でも、一九七〇年の宮家準『修験道儀礼の研究』（春秋社、一九八五年増補版、一九九九年増補決定版）は、人類的アプローチを援用しつつ修験道儀礼を分析している。文化人類学では、一九八七年の青木保『儀礼の象徴性』（岩波書店）刊行以降、儀礼研究がより盛んになる。

国内外の儀礼研究が活発となり、「仏教儀礼」の語が受容されていくなかで、各宗門でも儀礼を対象とした取り組みが図られる。浄土宗が、竹中信常を問題提起者として一九七七年にシンポジウム「宗義と儀礼」を開催したのを先駆けに、浄土真宗では、一九九四年の『教学研究所紀要』三号で「儀礼問題特集」が生まれ、真言宗智山派では、一九九五年の『現代密教』七号にて特集総合研究「真言密教における儀礼」が掲載された。また、曹洞宗では『曹洞宗布教選書 第一四巻 儀礼・清規』（同朋舎出版、一九八四年）、日蓮宗関連では、中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』（吉川弘文館、一九九九年）が刊行され、「儀礼」が各宗門に受容されていった。

二〇〇〇年代以降の仏教儀礼研究は、欧米の儀礼論を踏まえた、ルチア・ドルチェ・松本郁代編著『儀礼の力』（法蔵館、二〇一〇年）や、船田淳一『神仏と儀礼の中世』（法蔵館、二〇一一年）などが挙げられるが、中世仏教中心と言えよう。

三 まとめ

日本において宗教実践としての儀礼が研究対象となり、人類学や民俗学の成果を取り入れつつ研究が発展、藤井正雄を中心に「仏教儀礼」の語が定着し、各宗門でも儀礼に関する取り組みが導入される経緯を辿った。これらを踏まえ、改めて本題である近代仏教研究において儀礼が扱われてこなかった理由について三点考察し、まとめたい。

第一に、戦前の儀礼研究の主体が信仰を重んじる浄土真宗の僧侶であった点。浄土宗の竹中信常、藤井正雄らや、大正大学の仏教民俗学会で真言宗の観点を取り入れられたが、宗派性に偏りがあり、儀礼観が限られている。

第二に、「仏教儀礼」という用語の定着が一九七〇年代後半であった点。近代仏教研究「第一のピーク」より数十年遅れている。

近代の仏教雑誌においては、儀礼以外にも法会、法要、儀式、行事、といった様々な用語が実践を示す意味で使用されており、一般新聞では形式的であることを意味する「儀礼的外交」などの使用法が多く、儀礼概念がまとまりにくい。

第三に、儀礼の象徴分析にせよ、固有民俗の解明にせよ、「現在、まさに行われている」儀礼が中心である点。過去にあった儀礼である近代の仏教儀礼は主題としづらい。この点は冒頭で挙げた資料的制約とも関連する。しかし、資料の総数が少ない中世仏教では儀礼研究が見られることを考えると、資料が少ないのではなく、歴大な資料群のなかから、儀礼関係の項目を見つけるのが困難であることが要因と考えられる⁽³⁸⁾。

以上が、本稿で明らかとなった、近代仏教研究において儀礼が扱われにくい要因である。最後に再度柳川啓一の指摘をもとに、課題を提示したい。

宗教とは、信仰、信心を中心とするものであって、儀礼は二次的なものであるという見解がかなり一般的な時期があった。それは、宗教改革によって生れたプロテスタントイズムの傾向でもあったが、宗教学界もまた、こうした考え方の影響をかなり受けていたことは否めない。儀礼は外形的、表面的、固定的、習慣的などという形容詞をつけられて、いわゆる原始宗教の事例を除いては、儀礼の研究は従属的な地位を与えられていた⁽³⁹⁾。

この指摘は、宗教研究の分野における儀礼観を端的にまとめたものである。本稿でも見てきたように、信仰を優位におき、儀礼を従属的に見るプロテスタント的な傾向が国内外で徐々に見直されてきた。しかしこれは、近代日本における仏教儀礼の研究が進んでいない場合のストーリーである。日本国内ではプロテスタント的な宗教概念を受容したとされる近代にあっても、儀礼的要素は重視されていたと筆者は考えている。例えば一九三〇年代後半には、圭室諦成が、「儀式を澁刺と現代に生かし、大衆の間に生かすためには、かように古典的な、そして修道者の儀式を、現代的な大衆的なものへ、再組織することが必要である⁽⁴⁰⁾」と儀礼の重要性を説き、坐禅会の様子とともに「行の宗教」の時代が叫ばれていた。こういった動向は、戦後、戦争協力への反省などを要因として、タブーと見なされた。確かに、戦時体制に協力する形で儀礼が利用される場合もあった。しかしそれのみではなく、人々が仏教儀礼を通じて、救済を得ていたことも多分にあっただろう。本稿で論じたように、近代の仏教儀礼が扱われなかった理由を認識し、研究史で不足していた点を補いつつ、近代仏教における儀礼の役割を再検討することが、当面の課題である。

- (1) 碧海寿広・大谷栄一・近藤俊太郎・林淳「いまなぜ近代仏教なのか」『現代思想 仏教を考える』四六巻一六号、二〇一八年、一七七～一七九頁。
- (2) 碧海寿広『仏像と日本人―宗教と美の近現代―』中公新書、二〇一八年。
- (3) 大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ―仏教からみたもうひとつの近代―』法藏館、二〇一六年、八九頁。
- (4) 大谷ほか編前掲(注3)、二二八頁。
- (5) 碧海寿広『儀礼と近代仏教―新仏教』の論説から―『近代仏教』一六号、二〇〇九年。
- (6) 末木文美士『鎌倉仏教展開論』トランスビュー、二〇〇八年、二七頁。
- (7) アサド・タラル『儀礼』概念の系譜を描くために」中村圭志訳『宗教の系譜―キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』岩波書店、二〇〇四年。
- (8) アサド前掲注(7)、六二頁。
- (9) 竹沢尚一郎『象徴と権力―儀礼の一般理論』勁草書房、一九八七年、一―一〇頁。
- (10) 綾部真雄「イニシエーションの今日的可能性―解説に代えて―」ラ・フォンテイン、J. S. 『イニシエーション 儀礼的、越境』
- をめぐる通文化的研究』弘文堂、二〇〇六年、二七八頁。
- (11) <http://info.zassaku-plus.com/11019年6月13日閲覧。>
- (12) 姉崎正治『宗教学概論』東京専門学校出版部、一九〇〇年、一〇三頁。
- (13) 小口偉一書評 宇野円空著『マライシヤに於ける稲米儀礼』『民族学研究』七巻四号、一九四一年、一二九頁。
- (14) 伊藤幹治『宗教民族学』小口偉一編『宗教学辞典』東京大学出版会、一九七三年、三五二頁。
- (15) 宇野円空『儀礼』田辺寿利編『社会学大系六 宗教と神話』国立書院、一九四八年。
- (16) 棚瀬襄爾『宗教儀礼の序論的考察』『宗教研究』新一二巻四号、一九三五年、一二九頁。
- (17) 古野清人『宗教儀礼における社会的拘束性』『宗教研究』新一一巻五号、一九三四年。
- (18) 棚瀬は宇野の追悼文を投稿している。「宗教民族学者としての故宇野円空先生」『民族学研究』一三巻四号、一九四九年。
- (19) 堀一郎『棚瀬襄爾君の想い出』『東南アジア研究』二巻四号、一九六五年。
- (20) 竹中信常『宗教儀礼の研究』青山書院、一九六〇年、一頁。
- (21) 大澤広嗣「書籍紹介」中生勝美著『近代日本の人類学史―帝國と植民地の記憶』『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』三三三号、

二〇一七年、九七〜一〇九頁。ここでは、宇野田空、赤松智城、松井了穩、棚瀬襄爾といった浄土真宗本願寺派出所研究者の実績が提示されている。

- (22) 宇野前掲注(15)、二二七頁。
- (23) 竹中信常「シヨよりムードで 若い世代の求める宗教儀礼」『読売新聞』一九六二年四月一五日、朝刊九頁。
- (24) 柳川啓一「祭と儀礼の宗教学」筑摩書房、一九八七年、一九五〜一九六頁。
- (25) 柳田国男「葬制の沿革について」『人類学雑誌』四四卷六号、一九二九年、九七頁。
- (26) 柳田国男『葬送習俗事典』河出書房新社、二〇一四年、二頁。本書は『葬送習俗語彙』岩波書店、一九三七年を改題したもの。
- (27) 碧海寿広「五来重―仏教民俗学と庶民信仰の探求―クラウタウ・オリオン編『戦後歴史学と日本仏教』法蔵館、二〇一六年、同「仏教民俗学の思想―五来重について」『宗教研究』三三二号、二〇〇七年。林淳「仏教民俗学」日本仏教研究会編『日本仏教の研究法』法蔵館、二〇〇〇年。土居浩「仏教民俗学と近代仏教研究のあいだ―五来重に焦点を当てて―」林淳・大谷栄一編『季刊 日本思想史』七五号、二〇〇九年。
- (28) 中村康隆「仏教民俗学の構想」『仏教民俗学大系編集委員会編』『仏教民俗学大系―仏教民俗学の諸問題』名著出版、一九九三年、三四〜三五頁。
- (29) 竹中信常『宗教儀礼の研究』青山書院、一九六一年、二頁。
- (30) 藤井正雄「祖先祭祀の儀礼構造と民俗」弘文堂、一九九三年、六三頁。
- (31) 中村元監修、藤井正雄編著『日本人の仏教― 仏教の儀礼』東京書籍、一九八三年、一頁。
- (32) 藤井正雄「比較仏教民俗学 覚え書き―仏教の民俗化と民俗の仏教化をめぐる―」『仏教民俗学大系編集委員会編前掲注(28)、一七〜一九頁。
- (33) 松岡悦子「儀礼と時間」桑山敬己・綾部真雄編著『詳論 文化人類学―基本と最新のトピックを深く学ぶ―』ミネルヴァ書房、二〇一八年、一四九頁。なお、綾部恒雄・綾部裕子訳(弘文堂)と秋山さと子・彌永信美訳(思索社)が一九七七年に刊行されており、前者は二〇二二年に岩波文庫として再刊された。
- (34) 日本仏教学会編『仏教儀礼―その理念と実践―』平楽寺書店、一九七八年、一〜二頁。
- (35) 柳川前掲注(24)、一四七頁。ほかには、ダグラス・メアリー『象徴としての身体』(一九七〇年)、リーチ・エドマンド『文化とコミュニケーション』(一九七六年)、ギアツ・クリフォード『文化と化体系としての宗教』(一九六六年)、同『ヌガラ』(一九八〇年)といった成果が挙げられている。
- (36) 青木保・黒田悦子編『儀礼―文化と形式的行動』東京大学出版会、一九八八年。青木保ほか編『岩波講座 文化人類学九 儀礼と

パフォーマンス』岩波書店、一九九七年。

(37) 『仏教論叢』一三三号、一九七八年、一七七～二〇八頁。

(38) 拙稿「近代仏教資料の整備史―儀礼研究の発展に向けて―」『宗教学論集』三八輯、二〇一九年を参照のこと。

(39) 柳川前掲注(24)、一四七頁。

(40) 圭室諦成「儀式の現代的復興について」『禪の生活』一五卷一〇

月、一九三六年、六八～六九頁。

(41) 「写真 行の時代来たる」『大法輪』四卷四号、一九三七年。

(42) 拙稿「近代日本における『禅会』の普及に関する考察―『禅道』・『大乘禅』の記事を中心として―」『近代仏教』二六号、二〇一九年、第四章「一九三〇年以降の動向」を参照のこと。

〈キーワード〉近代仏教、儀礼、宗教実践、仏教儀礼、仏教民俗学